

〔資料紹介〕

## ホジェン族の叙事詩「イマカン」から

于 曉 飛

### 1. まえがき

中国黒龍江省最北のアムール河、ウスリ河、松花江流域には、中国で最も少数の民族ホジェン族がいる。彼らは文字を持たず、伝承により文化を伝えているが、漢語の教育普及と経済の立ち後れから近代化の波に押し流され消滅しようとしている。ホジェン族の伝承文学の中で、謡を織り交ぜて語られる叙事詩「イマカン」は、アイヌの英雄叙事詩ユーカラに似ている。本稿では、ホジェン族、ホジェン語に続いて、伝承文学、特にイマカン、およびイマカン「シルダル」物語について紹介する。

### 2. ホジェン族

人口は康熙（1662-1722）年間約12000人、1912年約2200人、1949年約400人、1990年4245人である。その内1590人が、黒龍江省内松花江下流、アムール河、ウスリ河の西側に住んでおり、主要な村は同江県街津口の（バツァ）八岔赫哲族郷と（ラオハ）饒河県赫哲族郷である。ロシア側に住むホジェン族はナーナイ族と呼ばれ、人口約15000人である。

生業は漁業と採集。衣服は、魚皮で作った衣服「ユゥピィブ」や獣皮の防寒具「パオピィダハ」を着ていた。保温靴は「ウンタ」とよばれる。食生活では、魚と獣肉を食べ、食べ方は多種多様である。「タラカ」は刺し身、「タスヘン」は魚のデンプ、「ショウル」は焼き魚、「ダウオリグス」は干した鮭、「イスアテンスア」はチョウザメのてんぷらである。夏の住居「サロ

アンコ」は、3－4メートルの細い木で作る円錐形テントで、内部に草を敷く。冬に住む「マジァズ」の内部は、仕切りがなくオンドルを焚く。現在は、瓦屋根のレンガか泥壁の家である。

交通手段に、犬橇を使うのでホジェン族は“使犬部”呼ばれていた。夏は木で作った船を使っていたが、現在はエンジン付き船、バスやトラクターを使っている。宗教は、シャーマニズム、自然崇拝が顕著である。楽器は、シャーマンが用いる太鼓と、口琴「コンカンジ」があり、口琴は哀愁に満ちた音を奏でる。工芸の文様は、精巧で、垢抜けしており美しく均斉がとれている。衣服の前襟、背中、袖口、裾、耳隠しなどに施されている刺繍には、雲紋、草花、蝶、蜜蜂などのモチーフがある。

### 3. ホジェン語

ホジェン族では、現在漢語が主で、50才以上はホジェン語を話せるが、40代では一部の単語が解るだけで、30代になると全く分からない。ホジェン語は、アルタイ諸語のツングース・満州語に属し、そのなかで満州語、シベ語と類似しており、伝統的分類では、これらの言語と女真語（死語になった）を一緒にして、満州語派の一つのグループをなしている。古くから黒龍江流域に広く分布して住んでいるホジェン族には、多くの方言がある。代表的な方言は、奇嫩人が話す方言と赫真人が話す方言で、奇嫩人は同江市勤得利から松花江下流に住み、赫真人は同江市八岔からウスリ江流域に住む。

ロシア側に住むナーナイ族の言葉は、ホジェン語と方言の関係にあると言われるが、風間伸次郎氏は、音韻対応をもとにツングース諸語を比較した結果、「ホジェン語はナーナイ語とは少しも本質的な共通点を持たず、むしろオロチ語やウデヘ語に近く、さらにいくつかの点で全く独自な特徴を示す言語である」と述べている。ホジェン語を調査する事は非常に興味ある課題である。

## 4. 伝承文学

ホジェン族に伝わる伝承文学には、<sup>(1)</sup> イマカン（伊瑪堪）、<sup>(2)</sup> タルング（特侖固）、<sup>(3)</sup> ショウフリ（説胡力）、<sup>(4)</sup> ジアリクオ（嫁令闊）がある。イマカンは、英雄叙事詩で、語りの中に謡がはいり、モルゲン（英雄）やアジェン（首領）がクオリ（神鷹）に変身する女性に助けられて敵や仇を討つ物語、狐仙の物語、シャーマンの物語などがある。タルングは、伝説物語で、謡はついていない。本当にあった話や、動物や漁労狩猟の言い伝え、氏族や民族の起源と歴史、儀礼慣習の起源、シャーマンを題材にした物語などである。ショウフリは、子供のためのジャンルで、寓話や伝説など、短いが内容は豊富である。登場人物はほとんど動物である。モルゲン、シャーマン、漁労狩猟、生活、愛情、ユーモア、短い謡を含む。ジアリクオは、歌謡で、ホジェン特有の曲調をもつ。

## 5. イマカン（伊瑪堪）について

1) 概要：ホジェン族の伝承文学の中で、イマカンは内容が最も豊富かつ複雑で、固有の形式を持ち、生活の中でも重要な地位を占めている叙事詩である。

長編のイマカンには「マントウ・モルゲン」、「シルダル・モルゲン」等があり、勇猛な英雄を謡っており、長さ15万字位、語りに10～20数時間かかり、一方短いイマカンは、神話や日常生活の物語で、演じる時間は10数分で、2、30分を越えるものは少なく、「スス」、「長虫兄弟」、「抗婚（結婚拒否）」などあり、内容は非常に複雑である。

イマカンは、狩や漁で露営したとき謡われるだけでなく、村で冬の夜、または冠婚葬祭時に謡われる。イマカンの謡い手は男も女もいて、年齢が比較的高い。謡う時間も決まっており、暗くなってから深夜まで謡い続ける。場所は一般に漁場の網置き場や狩猟の野営地、採集に出かけた宿、また冬の暖かいオンドルの上である。イマカンの謡い手で優れた人は男子が多く、女子が割と少ない。

イマカンに似た形式の語り謡う叙事詩は、ホジエン族だけでなく、アムール河やウスリ河流域のツングース満語の民族、例えば中国のオロチョン民族とエウエン民族、さらにソ連のナーナイ族、エウエンキー、オロチ、ウリチ、ネギダル等民族に伝わっている。

- 2) イマカンの語源：イマカンの語源はまだはっきりしていない。今中国の文献から見ると、イマカンの語源は、<sup>(1)</sup> オロチョンとホジエン語のimulhan (閻魔)、<sup>(2)</sup> ホジエン語のimaha (魚) という2つの説がある。ツングース語全ての言語の中に、imakanと発音と意味が似ている単語があり、例えば、ナーナイ族の一方言にあるimakan、エベンキー語のnimanakanの言葉の意味は、民話あるいは神話物語と考えられている。
- 3) イマカンの分類：イマカンの話の筋、人物の描写、構成から、次の3種類に分類できる。
  - (a) モルゲン・クオリ型：超現実的で不思議な能力をもつ「モルゲン(英雄)」と強くて勇ましい神鳥「クオリ(鷹)」に変身できる女性を主人公とし、一緒に敵を打つ長編英雄叙事詩である。マントウ、アントウ、アガデ、シルダル、ムドリ、マンガム等のモルゲンの話がある。
  - (b) 伝奇物語型：性格が更に豊多彩で、経験に富んだ超能力の男女を主人公とする。神話伝説を基に、狐と人の友情と愛、能力のある女シャーマンが死者の国まで魂を追いかけた経験、他国を流浪していた者の成功、肉親を危機から救う話、部族間の戦争の怨みなどの歴史伝承に基づいた話で、「ダナンプ」、「新シャーマン」、「ナウエンバールジュン・シャーマン」、「ガメンジュ・ガガ」等がある。
  - (c) 生活物語型：神聖でなく、幻想でもない日常生活を内容とした物語。主題は、時代と生活のいぶきであり、経験した現象や事件を題材とし、日常生活での人間関係(婚姻、家庭、愛情など)を話の筋としている。「嫁」「抗婚(結婚拒否)」などは比較的後になって出現した話である。
- 4) 採録整理されたイマカン：1930年から凌純声が細かく筆記記録した次の

19編を「松花江下遊的赫哲族」に発表している。(a) モルゲン・クオリ型：ムジューリン、シルダル、アルチウ、ドブシュ、ムドリ、シアンソウ、サリビウ、サリチウ、ヤラゴ、シラゴ、マントウ、ウブチウ、(b) 狐仙物語：ガメンジュ・ガガ、ダナンプ、(c) 歴史伝説：トルガオ、モト・ガガ、(d) シャーマン物語：イシン・シャーマン（ニサン・シャーマンから）(e) 旧約聖書のイエスの物語から：ナウエンバールジュン・シャーマン、(f) 新しい題材：チャジャンハテル。この19編が初めて漢語で記されたイマカンである。

1950年代半ばから約40年間で採録整理されたイマカンは下記の9部でその内7部が発表されている。以下にモルゲン名、①長さ、②採録年、③説唱者、④翻訳者、⑤整理者、⑥発表の形式で列記する。

- (a) アントウ\*、①33唱段3万字、②1958年、③呉進才、④尤志賢、⑤劉忠波、尤志賢、⑥黒龍江民間文学2、中国新文芸大系民間文学專輯1976-1982
- (b) マンドウ、①76唱段、6万字、②1981年、③葛徳勝、④尤志賢、⑤曉寒、馬名超、⑥黒龍江民間文学2と12
- (c) シェンソウ\*、①6万字、②1981年、③葛徳勝、④傳万金、⑤黄任遠、⑥黒龍江民間文学2
- (d) アガデ、①8万字、②1981年、③葛徳勝、④傳万金、曉寒、⑤曉寒、⑥黒龍江民間文学2
- (e) マルトウ、①4万字、②1975、1981、1986年、③尤樹林、④尤志賢、尤樹林、⑤黄任遠、⑥黒龍江民間文学20
- (f) シルダル\*、①12万字、②1983年、③葛徳勝、④傳万金、⑤傳万金、⑥満語研究1-4期、黒龍江民間文学20
- (g) ムドウリ、①5万字、②1984年、③葛徳勝、④尤志賢、⑤方行、王士媛、⑥黒龍江民間文学21
- (h) ウフサ、①2万字、②1987年、③葛徳勝、④黄任遠、⑤未発表
- (i) シャルン、①3万字、②1988年、③葛徳勝、④張嘉濱、⑤尤志賢、⑥未発表。

このうち\*印は、第一行がローマ字と国際音標、第二行が単語対応の

漢語、第三行が漢語翻訳形式で整理されている（翻訳：尤志賢、整理：傳万金、発表：満語研究1-6期）。その他、断片10数種がある。馬名超の「赫哲族伊瑪堪調査報告」の中に題名が出てくるが、内容が今では分かっていないものや、収録したが未発表のものがあり、まだ収録されていないイマカンが非常に多い。

- 5) 伝承方法：謡い手はイマカンを元のまま少しも変えずに謡うのではなく、謡うたびに創作を加えている。「イマカンを謡わせると、一人一人異なる」と言われるように、イマカンの大筋、人名、主人公が何回勝ったか、何回危難に遭ったか、シャーマンに何回助けを求めたか、重要な人物は何人かだけを記憶しており、その他は謡い手の経験や性格によって作られ、随時装飾をして、個々のイマカンが出来上がる。

イマカン伝承は、(a) 謡い手を通じての伝承：謡い手は語りが上手く謡も上手い聡明な人で、素晴らしい記憶力と表現能力をもち、「一度聞いたら忘れない語り謡い」と言われる。(b) 家族や社会を通じての伝承：葛徳勝はイマカンを謡う家に生まれ、小さい頃からイマカンの薫陶を受けた。呉連貴は家庭以外の社会活動で聞いて学んだ。(c) 文字による伝承：解放後民間文学研究者がイマカンを採集整理し、文字で発表した。これを見て謡って周囲の人に聞かせた。これは口頭伝承が文字伝承に発展したものである。(d) 即興演奏：この特徴はイマカンにある際立った表現法で、目の前にあるものを即興的に織り込んだり、細かく描写したり、自分の言いたい事を言ったり、からかったり、枝葉を付けて話したりするが、主題を決して離れない。

## 6. イマカン「シルダル・モルゲン」の梗概

三江流域に伝わる「シルダル・モルゲン」は、ホジェンの人たちに「太陽と共に出現した」最初のイマカンと言われる。

### (一) シルダルの生い立ち

昔、松花江と黒龍江が合流するところに村があり、シラグ・モルゲンが住

んでいた。ある年、外から攻めてきた城主ヘイ汗が村の人全員を捕らえて連れて行き、村を焼き払った。ただ残ったのは、シラグの13歳の娘シルゲン・ダドと10歳の息子シルダルだけであった。

## （二）木の神の助け

ある夜、家に祭った木の神が夢に現れ、ヘイジン・シャーマンがもうすぐ彼らの心臓、肝臓と血を食べに来ると告げ、粗櫛、梳き櫛と砥石の3つの宝を与え、川上へ逃がした。途中、ヘイジン・シャーマンが追いかけてきたので、娘は弟を連れて走り、粗櫛をなげた。すると平地一面にうっそうと茂った樹林が現われ、ヘイジン・シャーマンの行く手を遮った。しばらくするとヘイジン・シャーマンが樹林をくぐり追いかけてきたので、娘は梳き櫛をなげた。すると一面にびっしり繁ったいばらの茂みに変わり、ヘイジン・シャーマンを遮った。しばらくすると、またヘイジン・シャーマンが後ろから追いかけてきた。娘が砥石をなげると、高く険しい砥石の山になり、ヘイジン・シャーマンの行く手を遮った。姉弟二人が宝物を使い切り急いで逃げているところを、娘ウエンジンが助け、娘スワンの所に送り届けた。

## （三）武芸教育と両親救出に出発

スワンは姉弟に武芸と法術を教えた。瞬く間に、シルダルは20歳位に成長し、若者になった。ある日スワンはシルダルに言った。「あなたの両親は遠くで囚われています。両親を救いに行く勇気がありますか？ もし行きたいならば、私はあなたを助けたい。」シルダルは決心し、その夜のうちに3艘の大きな木造船を作り、敵を打ち両親を捜しに西に出発した。

## （四）最初の戦い

シルダルが出発したその日にある大きな村に着いた。城門が大きく開き、ムチコンとムジェという兄弟の好漢が出てきた。背は高くがっしりしていた。彼らはシルダルの痩せた体を見て、叫んだ：「奴隷になるなら命は助けてやろう。いやなら命をもらおう。」シルダルは「人数が多いけど、恐くないぞ。土下座して命乞いするなら、助けてやろう。」と言い合い、すぐ格闘になった。戦っても優劣がつかず、兄弟はシルダルの武芸が非凡であると悟り、すぐ妹ムミー・ダドを呼び出した。この娘は武芸が抜群で、普の人

は彼女にたち打ちできない。「妹よ、すぐニシキヘビを出して戦って、こいつの両足を締め付けて、やっつけろ。」とすぐ、地面からニシキヘビと大蛇が躍り出て、シルダルの両足を片足ずつ締め付けると、シルダルは手に力がなくなり、体も力が抜けるのを感じ、両足が重く半歩も足を踏み出す事が出来ず、ただ、体を支えるだけで、やっとである。

#### (五) クオリ「神鷹」の出現

このとき突然、彼の足元の土を掃き分け、一羽の神鷹が飛び出してきた。神鷹は少し舞いあがると猛烈に突っ込んできて、ヘビをくいちぎった。するとすぐ、ムミーは神鷹に変身し飛んできて、シルダルを嘴で切り殺そうとした。シルダルの30米位まで飛んできて、シルダルを切り殺す寸前に、足元からまた一羽の神鷹が土を破って飛び出した。これは、スワンが変身した神鷹で、鋭い嘴を上に向けると、ムミーの神鷹はさっと上に飛び去った。すぐ、嘴と嘴でかみ合い始め、空をぐるぐる回って戦った。ムミーの神鷹は、さらに兄嫁と弟嫁と100羽位の神鷹を連れてきた。しかし、スワンの神力は限りなく、100羽の神鷹を殺してしまい、残ったムミーと兄嫁と弟嫁3人を生け捕りにした。

#### (六) 西征の勝利と大団円

シルダルはスワンの助けを受けて、ついに兄弟二人を蹴殺し、西に向かって遠征を続けた。彼はまた一戦苦戦をしたが、ついには城を一つずつ破った。ある英雄は殺され、ある英雄は降伏し、ある英雄は彼と兄弟の契りを結んだ。最後に、シルダルとスワンは結婚し、ムミーを第二夫人とした。永年離れ離れになっていた両親と再会し、大アジェン（首領）として広く名を知られた。

この話は、シルダル・モルゲンが西に遠征し勝利をえて、人々が安心して楽しく暮らしたという物語で、ホジェン族に代々伝えられてきた。英雄シルダルとスワンの賛美、侵略者ヘイ汗とヘイジン女シャーマンに対する非難を通してみると、当時の部族間戦争が民に与えた災難を語っており、父母の敵討ちや邪悪征伐の正当性を賛美していることがわかる。この作品は、ホジェン族の古代社会の生活にあった光景をリアルに描いており、奴



隷を狩る、財産を奪う、村を焼くなどの当時の事実を反映しており、歴史的に大きな意味をもつ作品である。

## 7. むすび

以上は、イマカンについての紹介である。「イマカンの調査と保存」は重要な課題であるが、それを達成する第一段階としてホジェンの言葉、文化の調査を進めることが急務である。

### 参考文献

#### (1) 赫哲族の風習と伝承文学について

- ・凌純声著 1990『松花江下遊的赫哲族』上海文艺出版社
- ・徐昌翰、黄任遠共著1989『赫哲族文学』（中国少数民族文学史叢書）北方文艺出版社
- ・1983『黒龍江民間文学』（第5集 赫哲族民間故事專集）中国民間文艺研究会黒龍江分会 ハルビン
- ・黄任遠編著 1992『赫哲族風俗誌』（民族文庫15）中央民族学院出版 北京
- ・藤井知昭監修 1995『音と映像による中国55少数民族伝統芸能大系“天地樂舞”』日本ビクター

#### (2) 赫哲語について

- ・安俊編著『赫哲語簡誌』中国少数民族語言簡誌叢書、民族出版社
- ・尤志賢、傅万金編著 1987『簡明赫哲語漢語対照読本』黒龍江省民族研究所
- ・風間伸次郎 1996「ヘジェン語の系統的位置について」『言語研究』第109号、117-139
- ・尤志賢著『三江赫哲』第13集

#### (3) 東北アジアの民族について

- ・荻原真子 1989「民族と文化の系譜」『東北アジアの民族と歴史』（民族の世界史3）山川出版社、pp.53-124